

# 陶町歴史ロマン 7



## 6、戦国 陶の統治者

### (1) 小里領の水上・大川

私は今まで、陶は淡気の時代から恵那郡で、中世は遠山領に属すると述べてまいりましたが、この時代になると猿爪は遠山領ですが、水上・大川は小里領です。この

ことについて考察してみたいと思います。

土岐元頼は土岐氏 11 代当主成頼の 4 男ですから、東濃地方にも影響力があったと思われます（東濃担当であったとか）。元頼の子、土岐頼連が小里氏を名乗りました。

大川林昌寺の開祖「東陽英朝」は、たいへんな高僧で土岐持頼の子とされていますから、林昌寺建立の 1490 年には既に小里氏（土岐氏一族）の所領であったと考えられます。

なお、東陽英朝は大川林昌寺開山後、法雲山定慧寺（岐阜市）、龍慶山少林寺（各務原市）などを次々に開山し晩年は八百津に住み天寿を全うしたようである。



林昌寺と東陽英朝の墓

水上・大川に対する遠山氏の支配が比較的緩やかであり、そこに土岐氏の一族である小里氏が進出したと考えられます。あるいは、林昌寺建立に先立つこと 15 年、1475 年に大川窯が開窯していますから、当時、農業以外の貴重な産業「陶器産業」に目を付けた土岐氏が、1480 年頃に配下の遠山氏より大川と、小里から大川への通り道である水上（当時、小里から大川への道は川折からわらび坂を通過して、水上市場平へ出て大川へ行くのが一般的であった。）を譲り受けた（当時の土岐氏の力は絶大）のではないかと考えられます。

いずれにせよ、穏便に遠山氏の支配から小里氏の支配に移ったようです。

そして、支配の象徴として早い段階で林昌寺を建立したのではと考えます。（猿爪宝昌寺は 1636 年、水上浄円寺は 1685 年と大川の 150 年以上後です。）

その後、東濃には信濃勢の侵略があって、小里氏は一時的には東濃から逃亡（前述参照）しますが、基本的には土岐氏一族の小里氏の領でありました。

このことを裏付ける話として、猿爪天神社の創建をあげたいと思います。天神社（当時は北野神社）は1547年（大川林昌寺の57年後）創建で陶の神社の中では最も古い創建です。誰が、どういう理由で、この時期に建てたかを推理すると私の推理では以下のとおりです。

土岐氏に水上・大川を献上？した遠山氏は、力に差があるとはいえ悔しい思いをしたと思います。献上ではなくても、水上・大川の支配が土岐氏に確定し、林昌寺によって地盤を固められたので、このままでは猿爪も危ういと心配した遠山氏は、猿爪に支配の象徴として神社か仏閣を建てる必要があったのではないのでしょうか。

おりしも当時、北野神社は全国に勧請を行っておりました。小里の興徳寺（前身は大蔵



木造菅公像(もくそうかんこうぞう)

寺)には菅公像(菅原の道真公の像)が所蔵されています。北野神社の勧請者が小里に立ち寄った際、遠山氏（含む遠山氏の関係者）と村の守旧的有力者が、猿爪は農業に主体を置くよう、水上・大川と差別化すべく創建したのではと思います。

（天神信仰では、火雷神は天から降りてきた雷の神とされており、雷は雨とともに起こり、雨は農作物の成育に欠かせないものであることから農耕の神でもある。）そして、ほぼ同時期に神社とは向かいの梨ヶ根の山麓に「吉祥院」というお寺を建立したのではと思います。



天満宮拝殿

京都には北野天満宮とは別に南区に吉祥院天満宮があり、共に菅原道真公を祭神としています。吉祥院天満宮は菅原氏が信仰する吉祥天を祀り、道真公の生誕の地ともいわれているところです。また、神社内には伝教大師(最澄)も祀られているということですから天台宗とも関連している神社です。猿爪の吉祥院跡に残され

た石垣は、陶町史考によると天台宗様式ということですから話しは合います。

つまり、猿爪村では大川に林昌寺が建立された約60年後にその祟りも恐ろしい道真公を祀り、土岐氏に「猿爪は自領である。この地に手を出すと恐ろしい祟りがあるぞ。」というメッセージを送ったのです。

誤解のないように加筆しますが、土岐氏と明智遠山氏は仲が悪かったわけではありません。土岐明智氏（諸説あって系譜は不明）の分家が明智遠山氏という説もあるくらいです。

(かなり有力な説)

土岐氏と遠山氏は東濃の地で 300 年以上も両立併存していましたのですから、婚姻等により親戚関係にありました。土岐明智氏という氏名があるくらいです。したがって、良好な関係にあったと思われます。しかし、領地のやり取りですから多少の恨み・つらみはあって当然だと思います。

以上、もっともらしく私説を述べてまいりましたが、もっと単純な話で、古代から猿爪は恵那郡の淡気郷、水上・大川は土岐郡の餘部郷（50 戸未満のちいさな郷）だったのかもしれませんが。

東濃の地も、織田信長によって武田氏が滅んだことにより東の間の平和を取り戻します。本能寺の変後、東濃諸氏の領土は秀吉方の森氏による支配（秀吉方の森氏と小里氏の争いの中で陶を戦場とした大川十三塚の悲劇があった）の時期を経て、家康の時代には、岩村遠山氏を除いてほぼ旧領に収まることとなります。

## (2)水上・大川の統治者

水上市場平にある地藏菩薩立像が武士の墓「清源さん」です。但し、現在は子孫の方により引き墓されているようです。

石仏には「心窓清源信士」「小木曾家元祖」（先祖、祖先でなく元祖…注目）と刻銘されていました。

「清源さん」は、「清源さん」または「武士の墓」として陶の昔話に必ず登場します。この方について考察したいと思います。

「陶の今昔」では、慶長 14 年（1609 年）小里光明の子、和田彦五郎と妻木城主頼忠の娘の婚姻破綻に端を発した光明による和田弥左衛門一家皆殺し事件で、弥左衛門の三男は光明を恨み「死んでも小里家を恨み崇るから、遺骸を小里城の見える場所に埋めてくれ」との遺言を残した。結果、小里家は光明の孫の光重に嫡子なく、お家断絶、小里領は幕府直轄の地となった。（1623 年）と、載せていますが、小里光明も和田彦五郎も慶長 14 年にはすでに他界（妻木頼忠は生存中）していますので、この話はどうかと思います。

濃集小里記では、「小里光明が本能寺の変（1582 年）後、森長可に追われ、三河の小原に逃亡中、息子の光直が事件を起こし怪我をしてしまった。光直は怪我の回復が思わしくなく「故郷に帰る」と言いだしたが、小里は森氏の支配下なのでそれは叶わず、小里の見える水上市場平まで来て命絶えた。」とあります。

この話は、上記の小原で怪我した光直が水上で養生中に死亡し、猿爪に葬った。後に大川に引き墓し、それが武士の墓「十三塚」という話もあるようです。

但し、小里光直（幼名：彦五郎）は小牧長久手の戦い（1584 年）で負傷し、それがもとで死亡したが通説であることを記しておきます。

また、恵那郡誌では、清源さんの墓は小里家の重臣「小木曾某」の墓で、仕えていた小里家が断絶（1623 年）後、水上村に移りすみ主家再興を願ったが叶わず自刃した。とあり

ます。

私が考えるに、もし小里光直の墓ならば、関ヶ原の戦い後、家康より小里領を拝領した光親は、兄の光直（父の光明も存命）の墓を小里氏の菩提寺「興徳寺」に引き墓するだろうと思います。とって恵那郡誌の話は単純すぎるのではないのでしょうか。

清源さんは、水上の人が古くから長い間お参りしていること。水上村と領主の小里家を繋ぐ話として、昔話・逸話などに必ず登場する。この2点から小木曾某（清源さん）は、小里家の家臣で水上村・大川村を拝領していた人物ではなかったのではないのでしょうか。

そこで、私が私小説的に話を進めますと、小木曾某は1570年頃に水上村・大川村を統治するため水上村に移り住み、既に村内に多々ある小木曾姓と出会い、小木曾某は既存の小木曾家と区別する意味で、水上村支配者としての「小木曾家」の元祖と名乗った。

しかし、小里家も安泰とはいかず、本能寺の変（1583年）後、東濃の諸氏は織田方についたため秀吉方の森長可に攻められ、小里光明は徳川家康の支配する三河の義兄弟を頼って、川折から蕨（ワラビ）坂を登り水上村市場平に出て、大川村を通り小原村に逃亡します。

逃亡する際には、水上村で当地に赴任していた臣下の小木曾某に「森勢をここで食い止めて欲しい。俺は必ず復活する。首尾よく小原村まで逃げる事ができ、後に小里家を再興することができれば、貴殿を重職に引き立てる。」と言って、一族数人を連れて小原村に向かいました。

命を受けた小木曾某は小里家臣数人とともに奮闘し、森勢を一時的であれ食い止めたことにより主君の光明親子ほか一族数人は小原村に逃亡することができました。

この戦いは水上市場平から大川田の尻辺りで行われ、有史以来、初めて陶町内が戦場となった戦いでした。小里方は奮闘するも多勢に無勢、結局小里方は敗走、自害するものも



ありました。この時の小里方の死者が葬られたのが大川十三塚です。

小木曾某は地の利を生かして逃げ切り、小原村の主君のもとで主君とともに小里家再興の時を待ちました。そして、主君光明とともに小牧長久手の戦いに徳川方の一員として参戦、美濃へ出兵しますが、この戦いで負傷してしまい、小原村へ帰還、療養することになりました。

この戦いは和議により終戦、東濃は森領のままでしたが、その後の関ヶ原の戦い（1600年）で光明・光親の親子（小木曾某は怪我のため参戦できなかった）は東軍の一員として、東濃地区で戦功をあげ、光親は家康より給料 3600 石を賜りました。

こう考えると、後は様々な昔話、逸話に結びつきます。

小里光明より「小里家を再興することができれば、貴殿を重鎮に引き立てる。」との約束は、小木曾某が負傷の身であったこと、家康より小里領を拝領したのは光明ではなく息子の光親だったこと等により、結果として約束を反故にされた。小木曾某は主君小里家を恨み…。この恨み話が「陶の今昔」にある婚姻破綻に端を発した和田彦左衛門一家皆殺し事件での三男の墓となり、小里家を恨み…となります。

また、濃州小里記にある小原逃亡中に光明息子の光直が事件を起こし、怪我をして「故郷に帰る」と言いだし、水上村まで来て命絶えた。という話も光直を小木曾某に置き換えることもできますし、また怪我の原因を長久手の戦いにする話も有力です。その方が武士らしいかも知れません。

こう考えると、水上村の人々が長い間「武士の墓」として参拝するのも分かります。なにしろ水上村の領主さまのお墓なんですから。

